

50 50 50 50 50 50  
50 50 50 50 50 50 50  
50 50 50 50 50 50  
50 50 50 50 50 50 50  
50 50 50 50 50 50  
50 50 50 50 50 50 50  
50 50 50 50 50 50  
50 50 50 50 50 50  
50 50 50 50 50 50  
50 50 50 50 50 50  
50 50 50 50 50 50  
50 50 50 50 50 50  
50 50 50 50 50 50  
50 50 50 50 50 50  
50 50 50 50 50 50

3

社会調査で時代を測る  
— 潜在する大きなトレンド

吉川 徹

きっかわ とおる

大阪大学大学院人間科学研究科 准教授

2010.10.13



## 吉川 徹

きっかわ とおる

大阪大学大学院人間科学研究科准教授  
専門：計量社会学・格差論

1966年生まれ。

1994年大阪大学大学院人間科学研究科博士課程修了。博士（人間科学）。

主要著書として『学歴分断社会』（2009年，ちくま新書）、

『階層化する社会意識』（2007年，勁草書房）、

『学歴と格差・不平等－成熟する日本型学歴社会』（2006年，東京大学出版会）。

50 50 50 50 50 50 50 50 50 50 50 50 50 50  
0 50 50 50 50 50 50 50 50 50 50 50 50 50  
50 50 50 50 50 50 50 50 50 50 50 50 50 50

▶**司会** 皆さん、こんにちは。定刻になりましたので、始めたいと思います。

今日は、関西学院大学社会学部創設 50 周年記念連続学術講演会の第 3 回として、「社会調査で時代を測るー潜在する大きなトレンド」というテーマのもと、大阪大学大学院人間科学研究科准教授の吉川徹先生にご講演をしていただくということになっております。

本日の進行ですけれども、まず最初に社会学部長の宮原浩二郎から挨拶をさせていただきます。その後、吉川先生のご講演を一時程度していただきます。その後、フロアの方からの質問を受けて質疑応答の時間をとりたと思っておりますので、皆さん、その際には積極的にご発言ください。

なお、今日の連続学術講演会では情報保障としまして、西宮市聴力言語障害者協会ろうあ部会から手話通訳者として森川まなみさん、大川能子さん、宮垣祝子さんの三名の方にお越しいただいております。またパソコンテイクとしまして、関西学院大学キャンパス自立支援課から学生パソコンテイクとして羽賀千紗さん、尾谷香奈さんのお二人にパソコンテイクをしていただきます。どうかよろしく願いいたします。

それでは最初に、宮原浩二郎社会学部長のほうからご挨拶をさせていただきます。

▶**宮原浩二郎** 皆さん、こんにちは。

今日は関西学院大学社会学部創設 50 周年

記念講演会ということですが、お手元にもありますように、今回で 3 回目になります。4 月から始めまして本日で 3 回目を迎え、11 月に最後の 4 回目を予定しています。

今日は、社会学部ができたのは 1960 年なのですけれども、その第一期の卒業生の方々がいらして、何かこそばゆいような気がするのですが、第一期の卒業生の方々があのあたりに陣取ってられます。ほんの一言だけお話ししたいのですが、現在の社会学部は二年前に社会福祉学科が独立しまして、人間福祉学部というものになりました。別の学部になって、G 号館という新しい校舎に移りました。ですから、今の我々の社会学部の校舎、一これもうすぐ建て替えになりますけれども一、に入っているのは社会学部一つなのですね。そのかわり、社会学部は人間福祉学科が抜けた分を再生しまして、大きくなりました。社会学部のみで一学年 650 名という学部になっています。これは日本の社会学部のなかでも最大級に大きな社会学部でありまして、大きいだけではなくて、いろいろな種類の科目もあり、それから昨年就任されたたくさんの方の若手、若手だけではありませんが、たくさんの方の優れた研究者の方々をお迎えして、現在の学部になっております。

それと、もう一つ。今日は「社会調査で時代を測る」ということですが、関西学院大学社会学部は幾つか、一あまり自慢するものなんですが一、全国に先駆けてやってき

たことがありまして、その一つは社会調査士という制度です。これは、いま全国的な制度になっていますけれども、最初は、今から15年前の1995年に「関西学院大学社会調査士」という制度をつくりました。これは勝手につくったのです。国とか学会とか関係なく、まあ関係ありますが、しかし、基本的には関西学院大学でつくった資格だったのですね。それが今は全国的な制度に、関西学院大学の手を離れて全国的な制度になりました。

そういう意味で社会調査というのを非常に重視してきていて、もちろん調査というのはご存知のとおり質的なフィールドワークとか聞き取りもありますし、それから統計を使う、量的な調査ですね、両方あるわけですけど、今日は主に量的な調査との関連で、大阪大学の吉川先生をお迎えしてお話を聞くということでございます。

紹介は後ほどあるかと思いますが、計量社会意識論、ちょっと難しいような響きがあると思いますけれども、要するに、量的に世の中の流れをつかむというか、量的なデータの分析を通して世の中の流れを把握するというか、それも単なる世論調査とか意見というよりも、もう少し深いレベルですね、恐らく。人心の動きというか、そういうものを発見する、そういう社会学的な分析の、いい意味での醍醐味というか、そういうものを味わわせていただけるのではないかと期待しています。

今日の講演も含めて講演会の記録を集録した社会学部の紀要別冊を年度末に刊行する予定ですので、興味をお持ちの方はこちらの紀要のほうにも注目していただければと思います。

それでは、質疑応答も含めまして講演を楽しんでいただきますよう、お願いいたします。

▶司会 それでは、早速講演のほうに入りたいと思いますが、その前にごく簡単に、私のほうから吉川先生のご紹介と、私たち企画側のほうで今回の講演に是非とも吉川先生に来ていただきたいと考えた背景について、ごく簡単に説明したいと思います。

宮原学部長からも紹介がありましたように、吉川先生は一貫して計量的な、量的データに基づいて社会分析をされてきましたが、そのなかでも学歴、社会階層、格差ということを中心に研究をされてこられました。私たちの今回の一連の連続講演会／シンポジウムの共通テーマとして「大学教育としての社会学」を掲げております。大学教育として、社会学は一体どういうことを果たしてきたのだろうか。そしてさらに、いま何を果たしているのか、また、果たせていないのか。そして、今年50年目を迎えたわけですけども、これからの10年、20年、そしてその先50年というものを見据えたときに、大学教育としての社会学に一体何が期待されていて、我々は何を担っていくべきなのか。そうした非常

に大きなテーマについて考える機会を設けることが、そもそもの連続講演会の企画趣旨でした。そうしたとき、吉川先生に是非ともご講演いただきたいと考えたのは、まず計量的な手法を用いて、本日の講演タイトルにもあるように、潜在する大きなトレンドが何であるのか、それを社会的に解き明かすとはどういうことか。これは社会学にかかわるだけにとっても大きな問題です。これまでの潜在する大きなトレンドがわかってはじめて、これからのことも考えていけるというふうに、私たちとしては考えたということが大きな背景です。今日のご講演では、これからのトレンドを考えるうえで多くの示唆を与えていただけるのではないかと期待しております。

吉川先生の経歴についてですが、ご報告の最初でご自身から自己紹介があるとお聞きしておりますので、私のほうからはごく簡単に紹介させていただきますと、吉川先生は大阪大学人間科学部人間科学科を1989年にご卒業されて、大阪大学人間科学研究科の修士課程に進学をされました。そして1994年に同研究科にて博士号を取得されておられます。その後、大阪大学人間科学部の助手、静岡大学人文学部の講師、助教授を経て、2000年から大阪大学大学院人間科学研究科の准教授としてお勤めになっておられます。

今日のご講演ですけれども、受付のところで配付させていただきましたレジユメがございます。非常に詳しいレジユメを用意してい

たきましたので、それに沿ってプロジェクターのほうで適宜画面を映してのご報告というふうに聞いております。

それでは、吉川先生、よろしく申し上げます。

▶吉川 徹 ご紹介にあずかりました吉川徹でございます。

本日は関西学院大学社会学部創設50周年というたいへん晴れやかな機会にお呼びいただきまして、ありがとうございます。若輩ではございますが、できるだけご期待に沿う話をしようと思っております。ちょっと難しい話になるかもしれませんが、肩の力を少し抜いてお聞き下さい。

### 私と関西学院大学社会学部

私、この上ヶ原の社会学部にどういう縁があるかと考えてみたのですけれども、50年の歴史のうちの最後の五年間、秋学期の気持ちのよい日に毎週このキャンパスに上らせていただいて社会学の講義をしています。日ごろは先ほどご紹介いただきましたように、大阪大学の人間科学部という万博公園の横にありますキャンパスにありますが、こちらの学生さんは、私の本務校とはちょっと違うのです。どこが違うかというと、やはり一番違うのは人間科学ではなく社会学を目指したという、社会学徒としての心意気でしょうか。それが結構楽しみになっております。

私、いくつか本を書いておりますが、その

うちの最近書いた本については、「これって世の中でどういうふうな評価をされるのかな」ということを考えるときに、授業の機会を使って、関西学院大学の社会学の学生さんにどれくらいの反応があるだろうかというのを見させていただいております。こういう自分のためのマーケティングをしながらの非常勤講師というのは申しわけないことですが、社会学のちょっと専門的なところを一般向けに説明するというときに、私のなかで重要な位置を占めているのが、この学部生の皆さんの反応なのです。

私、大阪大学に1985年からおります。50周年のちょうど真ん中の地点というのが、今から25年前の1985年ということになりますが、この年が、今日の講演で折に触れて出てくることになります。この年に大阪大学の人間科学部に入学しまして、最初10年そこで勉強しまして、5年のインターバルがあって、その後はそこで教えているという形になります。

この50年という年数の幅を前半の四半世紀と後半の四半世紀で比べますと、前半のほうは社会学者にとっては華やかでいろいろと言いたいことのある時代なのですね。ところが、私が宿命的に扱っている時代、つまり後半の25年というのは、何が起こったのかが前の25年ほどははっきりとはわからない。ちょっと難しい時代が守備範囲になるわけです。

さて、社会調査というのは大きな研究費と年代の異なる研究者の日常的な助け合いによって成り立っている専門領域です。だから、私にとって社会学者のなかでの人脈というのは、とても大事なことになります。ここで今日ここに来られている関西学院大学のスタッフを見渡しますと、実は今日はともしゃべりにくいなと思っているのですが、私の師匠筋の方がおられるわけですね。大村英昭先生とか、厚東洋輔先生というところですね。師匠筋というだけではなく学説にお詳しい先生方ですから、修士論文、博士論文など折に触れて、笑われないように話をしようと思ってきました対象です。今日はちょっと肩の力を抜いて笑って聞いていただくと思うわけですが、そのメリハリというのはこれまた難しいなと、ちょっと緊張している状態です。

大阪大学の同門の大先輩ということになりますと、高坂健次先生などがおられます。後輩となると、大学院から同じ講座で一緒に研鑽していた金明秀さんがいますし、学部からの後輩としてずっと若いころから知っている人で関嘉寛さんとか、学部は違いますが文学部には三浦麻子さん、人間福祉学部のほうには同窓の杉野昭博先生や坂口幸弘さんがいます。教え子にあたるころになると、長松奈美江さんなどがいるわけです。あと、森久美子さんは私の学部時代の同期生ですね。

そのほかにも親しい交流をしている方とし

ては、三浦耕吉郎先生とか大谷信介先生、渡邊勉先生、石田淳さんなど、見渡しただけでも知っている先生方が多いです。

### ある調査実践をめぐるつながり

こんな雑談ばかりしていても・・・とは思いますが、社会学教育のなかでの社会調査というようなことを少し考えていくために、三浦耕吉郎先生と私のちょっと風変わりなつながりを話のまくらにしたいと思います。

三浦先生のおそらく生まれて初めてのフィールドワークというのは、学部生のときの社会調査実習だったと思うのですね。これは私の師匠でもある直井優先生が、東京大学で学部の実習をされていたのに参加されたものです。「職業とパーソナリティ」という調査なのですけれども、その学部実習の資料を見ると、友枝敏雄先生が地点サンプリングに行ったとか、調査票のチェックをしたのは今田高俊先生であるとか、調査に行った学部生名簿にも佐藤嘉倫先生とか、ここにも来られた山田昌弘先生とかのそうそうたる名前が載っているという由緒あるデータです。

1979年に東京大学が実施したこの社会調査のデータは、実はその後、私の修士論文のデータになりました。これは権威主義と社会階層の関係をみる研究ですけれども、それを審査していただいたのが厚東先生や大村先生です。やがてこれを関西社会学会で初めて発表するということになりますと、その部会

の司会是高坂健次先生でした。

さらに何年も後になって私は、この「職業とパーソナリティ」調査の対象者が中高年になってから、人生について、あるいは意識の変化についてもう一度調べたらどうなるのだろうかということを思いつきました。何とインターバルは26年もあったわけですから、これは私が研究代表者になって調査をしました。

この調査のときに一つ事件があったのです。どういう事件があったかという、調査員として学部生の三浦耕吉郎くんがかつて聞き取った調査対象者が拒否をされていて、なかなか説得できないというのです。皆さんこうお聞きになると、フィールドワークに長けた三浦先生が聞き取った対象者に、私のような計量社会学者が行って続きを尋ねてもなかなかうまくいかない、という話だとも思いますが、実はこのお話はそういうことではありません。1980年前後には喜んで社会調査に協力をした同じ対象者が、いま行くと調査に協力してくれないのです。これがこの25年に起こった時代の変化の特筆すべきところで、社会調査の環境が悪くなったということなのです。結局、この対象者は何度か再訪問してなんとか説得したわけですが、そうやって人生の最初の段階と後の段階のデータをとるという手間のかかることをやったのです。

こうして「パネル・データ」と呼ばれるも



のができるわけですが、その複雑な構造のデータを整理して分析できるようにしてくれたのが、長松奈美江さんだったりするわけですね。さらにこの調査のしんどいプロセス、つまり「社会調査の困難」については、社会調査協会の機関誌『社会と調査』の最新第5号で、—これは先週刊行された雑誌ですけれども—大谷信介先生と共同企画で「回収率を考える」という特集論文にしています。

何人かの先生のお名前をちりばめてきましたが、それぐらい私の研究のなかでは関学のスタッフ、あるいはこの学部というのは重要な関係があるということです。

### 計量社会意識論

自己紹介のキーワードとして他に挙げているのは、計量社会意識論と学歴分断社会です。これは実は私以外の研究者はあまり使っていない私の独自の言葉ですので、本題中に折に触れてお話しします。そちらに入っていきます。

まず専門領域としての計量社会意識論というのは一体何なのだとするところを、ごく簡単にお話しします。そして社会調査というのが今どういう状況にあるか、これも簡単にお話しします。そのうえで、社会調査のデータを使って計量社会意識論をするというと、一体どのようなことができるのかという実証の事例をちょっとお話ししようかなと思っております。

はじめは、計量社会意識論についてです。社会意識というのは全体社会に潜在する主体性、—いきなり難しい話になりますが—というふうに捉えることができると思うのですね。社会全体がもっているものの考え方もたいなものなのです。こういう意識とか主体、主観、パーソナリティ、態度と呼ばれているものへの注目というのは、社会学のオリジナリティの一つだと思います。社会科学の中には、法律学とか経済学とか経営学とか政策研究とかいろいろなものがあります。社会学を消極的に定義するならば、ほかの社会科学が使わないアプローチで社会の実態を見る学問だということができます。そうすると、社会学だけが中心的に扱っているものは何かということになりますが、それが主観、主体のあり方です。ここでいう社会意識だということになります。

ですから、これこそが社会学の重要なオリジナリティだと私は考えるわけですが、これも、これは結構扱うのが難しいのですね。どうしてかというと、社会関係、社会構造、これは、学歴とかお金とか仕事とかそういうものですが、このようなものは日常生活でもわりと生活の表面に見えているということがあります。人びとに何度聞いても「自分のプロフィール」として常に同じ答えをするような、はっきりしたものごとですから、わかりやすいということがあります。このわかりやすい部分で社会のハード面は構成されている



わけですが、意識について考えてみると、人のものの考え方というのは表面に現れなくて、とても見えにくいのですね。見えにくいけれども、社会学のオリジナルな重要な部分なのです。

もう一つあります。社会意識はわれわれの外側にあつて、社会的事実として外在的にわたしたちにマクロな力を働かせている。日本の社会規範が私に力を加えてくるので私の行動が規制されているというような、そんな考え方でいいと思うのですが、社会規範とか文化というものは、それぞれの人の持っている社会意識が日本社会全体で集まって、マクロな力を発揮することを意味しています。これが社会意識という言葉が社会学で使われるときの定義というか、ルールです。

調査データを使ってこの社会意識を扱うというのはどういうことかといいますと、捉えにくい現代社会のソフトウェアの部分の何とかが測り出すということです。ハードな構造の部分つまり社会関係については、政府系の調査があつたりとか、あるいは経済学的な調査があつたりして調べることができるわけですが、意識についてはなかなか調べることができません。それでも、何とかこの見えにくい社会意識をつかまえたいと思うわけです。これをつかまえる方法というのは、先ほどちょっと例を出しましたが、一人ひとりに調査票を埋めてもらって、ある一瞬のものの考え方をデータとしてとってくるわけです。そ

のミクロなデータを日本社会全体について組み上げて、人口ピラミッドをイメージしていただければいいのですが、これが日本社会全体の意識のあり方ですというふうに見るわけです。

ただしこの方法では、これは方法論的個人主義というような言い方をしますけれども、自分の外にあつて自分に力を加えるという社会意識の外在的でマクロな側面を見ることができないという限界がある。限界はあるのだけれども、人々の表面上見えないものの考え方というのがどういう仕組みで作られているのか、そういうところを計量的に測りたいと考えているわけです。

そこには、重要なトピックが二つあります。一つは、位階性。ちょっと難しい言葉ですが、社会の地位の上下にかかわる意識だというふうに考えてください。これは、自分の社会のなかでの位置づけがどこにあると見ているかという、地位アイデンティティであるとか、自分の暮らしがどれくらい豊かであるかというようなこと、一ウェルビーイング (well-being) というふうに言いますが一の捉え方のようなものです。

もう一つは、伝統性というものです。これは権威主義とか保守主義、あるいはナショナリズムもそうかもしれませんね。因習的な考え方、あるいはイエ意識、ジェンダーについていえば性別役割分業意識のようなもので、伝統性と近代性の対立・相克というよ

うなものを見るための考え方です。

位階構造というのは社会の上下の関係であって、伝統性というのは 20 世紀に捉えられていた、社会が産業化して変化していくというわりと直線的な時間の流れを捉える概念なわけですね。この二つ、つまり社会の上下の地位と、その構造の時間による変化というのは、社会の客観的な状態を論じるときの重要なトピックに他なりません。これらのものごとの主観の側のミラー・イメージ（鏡像）を見るというのが、計量社会意識論で私が特に関心をもっているポイントということになります。

そうなりますと、扱うデータとしては階層とか時代を測るものを使うということになります。資料に SSM (Social Stratification and Social Mobility) と書いてありますが、階層について 10 年ごとに時系列で日本社会を測り出している社会学の最も大きな権威のある調査データがあります。この調査研究に計量社会意識論は、いわばパラサイトしているわけです。ですから、計量社会意識論≒階層意識研究であるといえます。階層の研究をするということと非常に近い関係にあるということです。

その分析枠組みですけれども、それは極めて簡単で、その人が社会の構造のなかのどこに位置しているかという客観的属性と、表面上はわかりにくい主観、一心の中の様子—との関係を探るということです。これは英語

でいうと Sociological Social Psychology という分野になります。これを日本では社会意識論という。これは、今 70 歳代の見田宗介、宮島喬というような社会学者が一時使っていた言葉なのですが、わたしはこれになぞらえて、自分の研究を計量社会意識論とそういうふうと呼んできたわけですね。

「客観属性と主観の関係を探る」というとたいそうなことをしているように思いますが、ある人に出会ったとき、その人に何を聞けばその人の表面にあらわれていないものの考え方を言い当てることができるだろうか。一個だけ質問するとすれば何だろう、というようなことと近いわけですね。これを全員分組み合わせますと、社会のハードな仕組みをどう動かすと、見きわめにくい社会意識の側がどういうふうに変容するのかという、文化とか規範とか社会意識と呼ばれている、捉えにくくてどのような構造になっているのかわからないものについてわかる。社会のどのネジを動かせば、文化や規範がどう変わっていくのかという仕組みを捉えられる、ということになります。

このようなことを、実際に私は 20 年ぐらいつとやってきたのですが、一つの経験則があります。それは何かというと、市民目線ではっきり見えて了解されているものが、社会意識を形成、変容するということです。潜在しているもの、微妙なものというのは、人々の社会意識を大きく変えていく力をもってい

ない。当たり前のことですよ。これは言いかえれば、メルクマール、地位の目印として自覚しているものが重要だということです。明瞭な地位のメルクマールこそが主観的な階層の上下を決めます。はっきり「自分は社会の中で、この位置にいると思っている」と言葉にできるようなのが、その人のアイデンティティを決めるということです。これはジェンダー・アイデンティティについてもそうですし、エスニック・アイデンティティについてもそうではないかと思えます。時間軸についていえば、急激な社会変動があって時代が大きく変わったというふうにみんなが思っているとき、「昔はこうだったよね、今はこうだね」というふうな違いがあって、自分がどの時代の人かという位置づけがはっきりしている場合に、伝統性／近代性の傾斜を社会全体がもっているということになるわけです。

そういうはっきりした部分しか測り出せないというのが、一調査というのは不器用な研究ですから— 計量社会意識論の特徴だと思えます。それをちょっとまとめて言い換えますと、ご覧になってわかる左側のところですね[図-1]。高学歴化とか、ホワイトカラー化とか、女性の就業促進、都市化、高齢化というような社会のハードな変化、社会関係の変化、これを構造変動と言いましょう。それと、文化の、これ雲形になっていますが、格差イメージとかサブカルチャーとか福祉とか

公共性、あるいは環境に対する人びとの意識みたいなものがあるのです。こういう二種類のものの間の相互の関連を見るのが、社会学のトピックでしょう。

ここにおられる先生方の研究などでは、この左側のものと右側のものが混然一体となって、—ここでは矢印が回っている形ですけども— このループをうまく書き上げることが出来るわけです。ですが、この作業を例えば学部生がやると、なかなか先生方のように器用にはいかないわけです。どこをどう捉えているのかという枠組みが崩壊してしまって、何を言っているのかわからなくなって、似たような話を右から左へ、左から右へ、どっちなのだというのがよくわからないまま、ぐるぐると書いてしまうという危険性があるわけです。

私がやっている計量社会意識論は、この中心にある矢印の部分にあたりますね。本当はこの矢印は、行って還ってきたいわけです。だけど、まずは社会の構造がこう変化した、

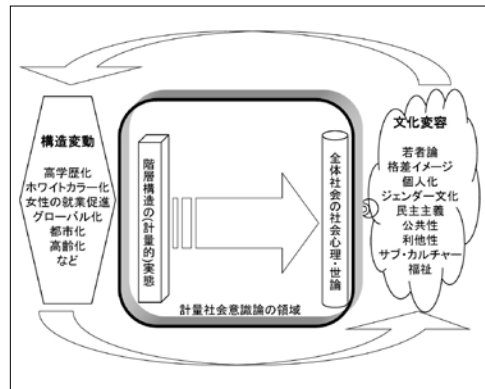


図-1

それで人々の意識がこう変わるという左から右へのこの矢印の部分を実際にしようというのが、計量社会意識論の考え方です。だとすれば、先生方の多くが展開されている現代社会論に対して、ごくごく基礎的だけれども重要な現代社会の仕組みを補給するロジスティックス部門、兵站を担っている、ということができるとかと思うのですね。

けれども、私が扱っている今の時代というのは、ポストモダンの浸透というのがだんだんと進んでいって、最初ははっきりしていた階級構造というのがよくわからなくなってきた時代です。最近、雇用の流動化というようなことがよく言われます。これは25年前にはなかった言葉です。形がはっきりしなくなって、捉えにくくなったということです。あるいはモダニティ、つまり伝統と近代の対立の枠組みと言われていたものははっきりしなくなって、どちらに向かって進んでいるのかというのがよくわからない状況にある。こうなってしまうと、今までやってきた計量社会意識論の伝統性と位階性というような関心事項というのは、だんだん雲散霧消してしまうということがあります。

そういうような時代の変化のなかで『階層教育と社会意識論の形成』（1998年、ミネルヴァ書房）、副題に「社会意識論の磁界」を付けたものが、私が最初に出した本なのです。これは、計量社会意識論の本です。それから『学歴分断社会』（2009年、ちくま新書）

まで、これが一番新しい去年出した本ですけど、何冊かの本を出しているわけです。これら一連の著書で、どういうことをしていったかを振り返ってみましょう。

私もはじめはすごく演繹的に考えていまして、先行研究で言われている理論が、実際にデータをさわって確認しても成り立つだろうと信じていたわけです。この分野では、カール・マルクス以来のことですが、職業階級、生産手段の所有／非所有というような構造が、その人の主体のあり方を決めるというふうに言われているわけです。つまり、職業が人の社会意識を決めるという形になっていると言われるわけですね。だから、「社会意識論の磁界」といえばマルクス主義的な階級論のことだろう、というのがスタートラインだったわけです。ところが、実際にそうなっているかというのを調べてみると、この関係ははっきりとは出てこないのです。

何が出てくるかという、この国のデータから出てくるのは、学歴が高い人はある特定の意識をもち、学歴の低い層はそれとは違う意識をもっている、そういうようなことだったわけです。

ところが、「このことが測って出てきました」ということを言うと、「測って出てきたはいいけど、それにどういう理論がついているんだ」、「だれが学歴でものが決まるって言ったのだ」というようなことを質問されたりすることがあるわけです。「それはだって、



会の変化の軌跡を知るといような研究もあります。そうやって調査の及ぶ範囲を、時間的にも拡大しつつ、国際化という流れを受けて空間的にも拡大するようになったというのが、この25年の社会調査データの動きです。もちろんコンピュータの性能の向上ということもあって、相応の分析技法も開発されていて、マルチレベル分析とかイベントヒストリー、あるいは多母集団同時分析という少し難しい方法ですが、そういう複雑な構造のデータが分析できるという時代に入っています。

もう一つの変化は、それにあわせてデータの二次利用がなされる時代になったということです。20世紀を指して「20世紀は映像の世紀だ」といような言い方をすることがあると思います。これはどういうことかという、20世紀の歴史については映像で追うことができる情報が残っているということです。社会調査の世界にも同じようなところがあって、20世紀全体とは言いませんが、後半については一人ひとりの市民がどういうふうに生きたかということを社会調査データが確実に調べていて、市民レベルの歴史を数字で取り出すことができます。例えば1930年代のイギリスとか1950年代のアメリカ、あるいは1980年代の日本といような、それぞれの場所の一人ひとりがどういうふうに生きていたかという情報が蓄積されているわけです。

そして近年では、社会調査で得られた事実というのは、研究者個人がずっと持つておくものではなくて、社会から得た公共の情報ですから社会に公開して還元しなければならないといような倫理が、徹底されるようになりました。ですから、日本社会について学部生が調べようとしたときJGSS (Japanese General Social Survey) とかSSM (Social Stratification and Social Mobility)、NFRJ (National Family Research of Japan) など、これらがどんな調査かを説明することはここではできませんけれども、いろいろなデータについて、「これを使いたいです」と正規に申し入れれば、データアーカイブ、一図書館みたいなものですね— そういうところからダウンロードして使えるようになっているわけです。言い方を変えると、ほかの人がとったデータで論文執筆ができるということです。

欧米ではどうなっているかという、こういう二次分析が今、大流行みたいな形になっています。それは、自分ではその場所に足を踏み入れたこともないような国の、生まれる前の時代のデータであっても、自分の関心に合うよいデータがあれば、それを使って仮説を検証することができるようになったからです。

そうなると、私のように現場で調査に携わる人間はこう思うわけです。「今の時代はもうわざわざ自前で調査をしなくてもいっばい調査データはあるし、もういいや」と。



くに一般性のある理論の検証をするには、何も今の日本社会でわざわざピンポンと鳴らして家を訪ねて、怒られたり、おどされたり、犬をけしかけられたりされながら一生懸命、戸別訪問面接調査をする必要などないわけです。どっかその辺にあるデータを使って検証できれば、そのほうがずっと楽だということです。二次分析をする、あるいは実験室実験をするというようなことで事足りるのですね。

クロスセクショナルな調査を重んじるというのは日本の社会学のよい伝統です。そしてこれは、社会調査士の制度が普及して、現在では一見すると盛んになされているように見えます。しかし実は、私がこの「業界」に入った頃と比べると、クロスセクショナルな調査をやる必要性は薄くなっているというのが現状です。計量分析は今では専門家しかできないというわけではなく、だれでもできるし、自分でとったデータじゃなくても使用权をもてるということです。

しかも、もう一つ深刻なことは、この時代に起こっている新しいことを知りたいと思うから調査をするわけですが、今は社会の変化がそれほど激しくはないということです。1975年とか1985年の高度経済成長の右肩上がりの時期であれば、「今の日本を調べたい！」ということになるかもしれません。例えば中国であれば、—中国で今、社会調査は盛んなのですけど— 今を調べておきたいというのはわかるのですね。だけど日本では「2010年の今わざわざ調べんでも、2005年のデータがあるからそれと一緒にやる」というような状態になっている。そうした時代の特性もあるということです。

一つ実例を示します。日本の継続研究の代表的なものであるSSM調査というのが、どういうふうにデータを集めてきたかということです。ちょっと見にくい表ですが、色で大体理解してください[図-2]。ここには1955年から2005年まで6回の調査があります。あ、2015年まで書いてありますね。も

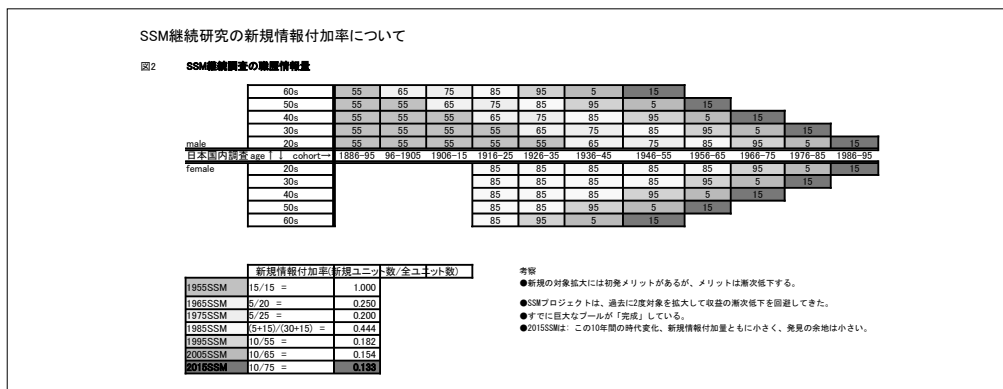


図-2



しやるとしたら次は 2015 年ということになるわけですが、この調査というのは、人の人生における職歴というのをずっと調べていくものです。これについて 10 年ごとの生まれ年の区切りで見ると、50 年継続したこの調査は、なんと 1895 年生まれから 1985 年までの生まれまでの日本人の職業についてのデータを、ずっととってきているわけです。

こういうふうにはデータをとると、1955 年調査ではこの三角の部分がとれます。次の 1965 年にはそれぞれの同じ世代の人が、—これをコーホートと言いますが—新しい職歴を積んだ 10 年分がつけ加えられます。それにプラスして新しく大人になった一番若いコーホートですね。ここの部分がつけ加わって、こういうふうには斜めに情報が入ります。こうして 75 年、85 年と進み。85 年まで行ったときに、この調査は女性も調べようということになったわけです。そこからこういう大きい形になったわけですが、95 年、05 年とさらに進んでいます。要するに階層時系列調査というのは、一番端の一番新しい 10 年の情報だけを足していくもので、それ以前のところは既知だということです。

この SSM という大調査は、もう 100 年以上のコーホートにわたってこのような職歴を把握しているわけです。これは日本の産業化を捉えたデータで、代々、富永健一とか、先ほど出てきた直井優とか盛山和夫とか、日本の名立たる社会学者が取り組んできたもので

す。では 2015 年にこの SSM 調査をしたら、その先生たちと同じように新しいことを発見できるかどうかということ、—たぶんこれ、2015 年にやると思いますけど—新しく加えられるデータは、全情報のうちのわずか 13.3% なのですね。ということは、87% の情報は既にあるということです。

13.3% の分量で、しかもこの面白みのない 10 年間の時代変化をとってきて、それで例えば 1975 年 SSM 調査に匹敵する新しい発見があるかということ、これは無理なのです。そうすると、今さらこういう「伝統芸能」をやって「私も富永健一先生みたいになるぞ!」と言ったとしても、—私はそんなこと言いませんけど—なかなか難しいものがある。これがこの調査がかかえる現状です。ではこの調査どうするんだ? というのが、いま一つの課題になっているわけです。

それでもなお大規模社会調査をする積極的な意義は何だろうかというとき、クロスセクショナルな関心に立ち戻るということもあるかもしれません。今の社会で、新しい調査で調べてみないと把握できない新しいこととは何なのか? この構造変動が小さい時代に潜在しているトレンドって何なのだ、ということです。その一つの手がかりとして計量社会意識論というのがあるのかなということで、残りの時間は私が今やっている事例の紹介に入ります。

## 一億総中流から格差社会へのトレンド

ここからは、皆さんが聞き覚えのある親しみ深い話になります。

1985年というのが、今日の話の一つのポイントだと言いましたが、この時代というのは高度経済成長の終わりの余韻が少し残った一億総中流の時代です。ところが今はそれが一億総格差の時代になっている。この総中流というのを語るポイントは何だったかというところ、日本人の9割が「あなたは、上中下の層に分けるとすると、日本社会のうちのどの位置にいますか」という質問に対して「中だ」と答える、一まさに総中流ですね— ということだったわけです。つまり、計量社会意識論が総中流現象の震源にあったわけです。

けれどもその後、激しい変動がみられず、質的にいくらか変わっただけというあまり面白みのない25年の時代を経た今では、「いやいや、日本は格差社会だし、中の人なんて少なくなって、下流と上流ばかりだよ」という社会イメージが言われるようになっている。これは、一体何がどう変わったのか。この変化を調査データで捉えることができないか、というようなことを考えたいわけですね。

そうすると作業仮説としては、1985年と四半世紀を経た2010年の時点間比較分析をして、その結果を知ってみたいというふうに思うじゃないですか。それで、やってみるわけです。そのときの枠組みとしては、繰り返しになりますが、社会意識の上下の関係とい

うのと、伝統／近代という考え方の筋道はどこに行ったのかということを考えるわけですね。

まず位階性については、いわゆる中意識として先ほど説明した「上中下に分けるとすると、あなたはどこにいますか」という問いを用います。これを階層帰属意識といいますね。

伝統性のほうは、権威主義、因習主義、あるいは性別役割分業意識、政治的な保守というようないくつかの側面から測ることができます。これらのものは25年前には社会階層と密接に関連しているとされた。位階性の傾斜が見られ、上層と下層で傾向が違うと言われていたわけです。直井優先生は、メルビン・コーンというアメリカの社会学者の研究概念を用いてこれを、「セルフディレクション」というふうに言っています。「セルフディレクション」というのは、近代的なパーソナリティの人だと自己指令的（自律的）であり、自分でものを考える。伝統的だというのは、古くからなされてきたやり方に同調する、そういう位階制と連動しやすい基軸があるということを使ったものです。

なお、ここで分析する2つのデータは詳しくはこういう特性をもっているのですが[表-1 p.72]、ここのところは飛ばします。質問がある人はしてください。

じつは、1985年SSM調査には、総中流を解明するために階層意識の質問が膨大に投入

されているのです。階層イメージとかセルフディレクションの変数とか、そういうのが入っているわけです。ところがこれらを入れてみて、分析しようと思った時点は、これは私が学部3回生とか4回生、あるいは大学院に私が入った時代で、1987年、1988年あたりです。この時代のことを何とっているか、皆さんご存知だと思います。バブルです。ここで、中流ブームからバブルの時代になってしまったために、この総中流の仕組みを測り出したデータは、意味づけ不十分なまま、あまりみんなが関心をもたなくなって「死蔵」されることになったのです。1985年の調査のヘッド・クォーター（調査委員会事務局）は、今私のいる大阪大学の講座にあって直井優先生が責任者だったわけですが、私は85年データのことを「山田丘の埋蔵金」と、こういうふうに呼んでいます。つまり、私の講座の周辺に、25年間ずっとほっておかれた一億総中流のときの社会意識のデータがあったということです。

それでは、格差社会のほうを解明するためにはどうすればいいかという、その総中流を聞くための道具を使って、もう一回、今の日本社会を構成する人たちに聞いてみたらど

うなるかを考えて、同じ形の調査をするということ。ポイントはまだあります。団塊の世代を分析対象から外すということです。これはどういうことかという、この世代は人口が多くて、この世代が入っているとデータは「昭和を引きずるデータ」になります。この世代を見ているかぎり分析結果は大きく動かないのです。けれども、この世代を対象から外して、もしこの世代がない、そこから下の世代だけの日本社会になったらどうなるのかというふうに見ると、結果は劇的に変わるわけです。それで、あえて時代の変化というのを見るために対象年齢層をそこで区切りました。今年59歳の人から平成の初めの生まれの人までが新しいほうの調査対象者になります。

これで時点間比較分析をしていくことにする。分析結果のところは好きな人は見てください。計量的な部分についてはまた別の機会（2010年11月の第83回 日本社会学会大会報告）にお話しします。

この結果のダイジェスト、要するに何がわかったのかということについて、ちょっと情報を共有しましょう[図-3]。下の部分が

表-1 分析する調査の概要

名称	1985年SSM調査	2010年SSPP調査
対象母集団	20～60歳男女（1925～64生年）	20～60歳男女（1950～89生年）
抽出法	全国の層化多段無作為抽出	全国マスターサンプルから層化比例抽出
有効回収数	男性A票: n=1,102, 女性F票: n=1,301	n=1,385（男性: 672, 女性: 713）
回収率	男性61.3%、女性67.9%	55.40%
調査実施時期	1985年11月	2010年2月
調査メソッド	訪問面接法	郵送法

重回帰分析という方法で見た1985年の実態で、上が2010年の実態です。今から四つの社会意識の局面の時代変化をお見せします[図-4]。図の形としては、説明する側にある客観要因のほうには、年齢、学歴、職業、経済力が入っています。

説明される側には順次、社会意識を入れていくわけですが、まず男性の中意識ですね。上、中、下のどこにいるかという階層帰属意識。これを見ます。そうすると1985年では、経済力がある人が階層を上だと自己評価しているという実態だけがあります。当時はそれしかなかったのです。ところが今調べてみると、当然、経済力がある人は階層帰属意識が高いという因果構造は確認されるのですが、驚いたことに、それに加えて学歴が高い人は階層帰属意識が高い、あるいは職業的地位がホワイトカラー層に近いほど階層帰属意識が高いという、別の要因の説明力も増しているわけです。全体として、85年にはこの四つのことを聞くと階層帰属意識が11.4%説

明されるという数字だったわけですが、説明力の大きさをあらわすR2という数字が2010年では2倍以上になっている。つまり、客観階層から人の中意識がよく説明でき、はっきりわかる時代になった。翻って言うと、85年の日本人は浮かれていて、お金によってわずかに階層要因に係留されているにすぎないという状態にあったわけです。その形が今は大きく変わっているということです。

では、女性については何を見ようか。生活の満足度というのを見ましょう。そうすると85年には4.1%の説明力をもって、やはり世帯収入が多い人が生活に満足しているという状況があったわけです。今の女性はどうかというと、世帯収入が多いと、それは満足します。その満足度を決める強さも強くなっていますが、加えて、自己実現というふうに言いますが、自分の職業的地位が高いことが生活の満足に結びつきます。学歴が高いことも生活の満足に結びつくというふうになっています。ですから、2010年では説明力は4倍以

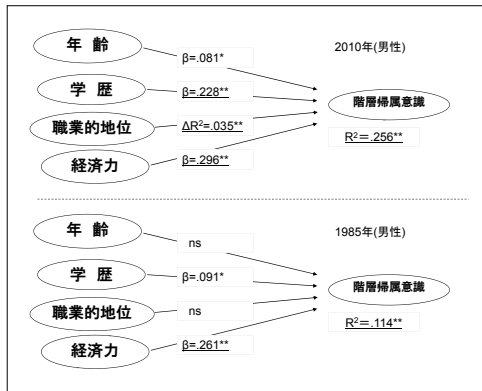


図-3

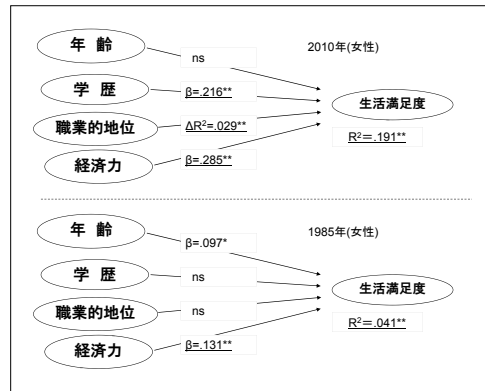


図-4

上になっているわけですね。85年の女性たちはどうして生活に満足なのかというのはよくわからないけれど、何となく満足だったという浮遊した状態にあった。けれども今の、女性の満足度というのは、客観的な要因によって説明されやすく、決まりやすくなっている。こういう時代変化があったということです。

では、もう一つの論点である伝統性のほうはどうなのかというと、85年の時点では伝統性に対して、—これは権威主義の態度尺度を使っていますが— 学歴が低く（マイナスの値）、年齢が高いということが効果をもっていたわけです。少し状況を説明するならばこの時代には、低学歴・高年齢、これに付随してマニュアル職（ブルーカラーや農業）という職業的な地位にいる女性が伝統的な価値観をもつ典型的な集団だったわけです。それが若年・高学歴・ホワイトカラー層との集団間の価値対立という構造をもっていた。ですからこの時代には、伝統性と近代性というのが位階秩序とリンクしていたわけです。ところが、今のデータではその構造がみえなくなっています。

そのカラクリの一つは次のようなことです。85年には若い人は学歴がすごく高い傾向にあったのですが、今は、私の世代の同年人口の学歴比率と今の大学生の学歴比率とがほぼ一緒です。よく私が毎週の授業で言うのは、私が大学に入った頃の「関学」と、今の

皆さんの「関学」は意味が一緒と言ってもいいけど、私から見て25年上の世代の「関学」は全然意味が違うということです。つまり、右肩上がりが終わった後の、横ばいの25年の始まりと終わりの二点を比べると変わらないのだけれども、50年前と25年前を比べると学歴の意味が大きく違っているということです。そういうふうには、この図でいうと左側の要因の形（生年・学歴・仕事の相互関係）が変わってきたことによって、その当時見られた社会意識と階層を結びつける力が、今では検出できなくなっているのです。

女性についても、「男性が中心的な役割を果たし、女性はそれを補佐するものだ」という性別役割分業を分析してみると、85年は、やはり学歴が低く年齢が高い層が「そう思う」と回答するというふうには、伝統的性別志向だったわけです。しかし今はそういうのがない。逆に、若年層の専業主婦志向とか高学歴層の専業主婦志向みたいな新しい流れが言われていて、85年当時女性たちに見られた「古い考えか、新しい考えか」という価値観の対立構図が、今では検出できなくなっているのです。

「何を当たり前のことを言っているのか」と思われるかもしれませんが、こういう基礎的な部分のロジスティックスがあってはじめて、少し飛躍できるというか、天空を翔けるような一般理論が描けるわけです。この部分はだれかが確かめておかなければならない。

わかっているようで、ほかには多分こういうデータを持っている方はあまりいらっしゃらないんじゃないかと思います。時間が余ればこの辺のキャラキをもう少し説明しますが、これが時代変化についての分析結果です。

ポイントを確認します。このように同じ質問を25年前の一億総中流の日本人と今の格差社会の日本人に投げかけたデータを分析することで、わかってきたことがあります。

それは、社会の上下関係についての人のものの考え方である階層帰属意識などを見ると、様子がおかしかったのは、むしろ昭和の終わりの1980年代の日本人のほうだったということです。この時代の日本人は、客観的な地位と主観のあり方の関係をみるかぎり、申しわけないのですが、いわば「浮かれて」いる状態だった。客観的な状況が見えていない状態だったということです。

対照的に、高度経済成長が完全に過去のものになり、正確に自分の立ち位置を認識できるようになった現代日本人の姿というものも現われてくる。地位のメルクマール、何が重要な地位の基準かということを考えると、85年というのはバブル前夜ですから拝金主義です。お金を持っているかどうか、それが多層的な階層構造、つまりお金があるかどうか、学歴が高いかどうか、職業が安定しているかどうか、といういろいろな観点から総合的に判断されるようになったというのが、

今の格差社会の実態です。

ですから、今の格差社会の到来で人びとは世の中の見通しが効かなくなっているというふうに、先生方が不用意に書かれることを、私はお勧めしません。今の日本人は、80年代の日本人よりは、社会がよく見えるようになっている。そういう面があるわけです。

ところで、配布資料の中には「学歴の白鵬化」という言葉が出ています。分析結果を見たときに、どんな意識についても、職業は思ったほど効かないが学歴がどんどん効くようになってきたという話をしましたね。これは、私の学歴分断社会の理論がマルクス主義階級論を上回ったということかということ、そうではない。今、白鵬というモンゴルから来た横綱が連勝を続けていますが、あの白鵬は昭和の大横綱双葉山より強いのかというのを考えてみる。すると「いや、白鵬が強いわけじゃなく、ほかの力士が弱いのだろう」というふうに見えてくるじゃないですか。同じように「今、学歴でものが決まるようになったのはなぜですか。世の中でそんなに学歴、学歴って言ってないじゃないですか」というように考えると、学歴以外のカウンターパート(対抗仮説)となるべきものが、あまりにも弱すぎることに思い至るのです。よく言われる言葉では、雇用の流動化がありますが、学歴以外の多くの階層要因がリキッド化(液状化)している状態なので、一生を通じて変化しにくい学歴だけが意識形成の力をもってしま



ということですね。

そしてもう一つ確認しておきたいのは、社会意識の伝統性は、階層構造の伝統／近代の枠組みが崩れたために消え去ってしまったということです。ここでは細かく説明しませんが、高年齢で、低学歴で、マニュアル職に就いている集団と、若年・高学歴・ホワイトカラー層の間の価値対立というのがあったのが昭和の終わりの時代です。あるいは高年齢で専業主婦か、働いていてもせいぜいパートという女性たちと、若年・高学歴・就業継続を希望する若い女性たちとの間の単純な対立の構図というのもあったわけです。1985 年は男女雇用機会均等法施行直前という状況ですからね。

皆さんご理解していただけるとは思いますけれど、今の社会ではこれらは消えてなくなっている昭和の枠組みだったわけです。ですから、同じ枠組みを今のデータに仕掛けると何も出てこない。逆に、若年・高学歴層の右傾化とか専業主婦化とか、若年大卒層が自民党支持なんていいますが、実際はそちらの方向の新しい結果が 2010 年の調査からは出てくるわけです。昔の大学紛争とかの時代のことを考えると、「これはどうなっているのだ？」というふう思うじゃないですか。そういうふう、昭和の時代の当たり前と思っていた構造がすっかり崩れている。キーワードの見えない次の時代に向かっているというのが、ここで得られた見通しです。

ちょっとだけ時間が余りましたので、このお話をしておきましょう[図-5]。

1985 年と 2010 年について、この時代を生きてきた私たちは「何も変わってないや。あまり変わらない 25 年だったな」と思うかもしれません。しかし、皆さんのお手元の資料、一色が付いてなくて申しわけないですが—その図に示されているのは日本人の学歴の分布です。上のグラフでは 1915 とか 1920 とか 1925、下は 1940、1945、1950 となっていますが、これは生まれ年です。ご自分の生まれ年を当てはめてみられるとわかると思いますが、その生年の学歴が中卒、高卒、大卒でどういう比率になっていたかを表わしています。

私が 18 歳で大阪に出てきて見た日本社会というのは、「1985 年の日本社会」の形になっていたわけですね。これは、見てわかるとおり、年齢で傾斜のついたトリコロール（三色）の状態です。世の中のマジョリティ（多数派）は、この時代、まだ中卒層だったわけです。

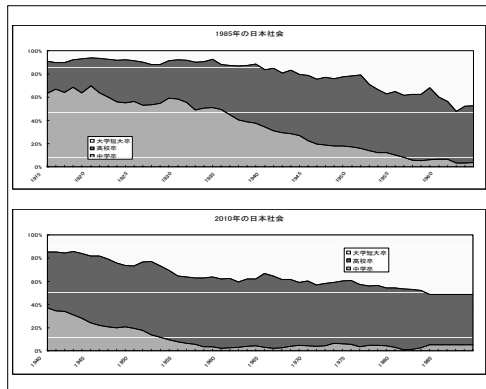


図-5



大卒層というのは若年の黄色い（トーンの薄い）ところですね、ここにちょっといる。これで社会が構成されていたわけです。

それが今の2010年の日本社会では、この調査データのうちの60歳より若い人をとっているということですから、ここ（1950）で切っているわけですね。このあたりで切って、そこから右側のデータを見るということをする、これは、私の言葉でいう「学歴分断社会」です。黄色い（トーンの薄い）ところと赤い（トーンの濃い）ところの二項対立の構図というふうになっているわけです。だから、日本人の平均的な学歴というのをよその国で聞かれると、私たちは答えることができない。日本人の平均教育年数というのを出すと、高卒の12年でも大卒の16年でもない13.5年とか、そういう変なところに出てくるのです。「平均的な学歴」は日本では実態を表しません。半分ずつ、フィフティ・フィフティでこういうふうな対立の構図になっているということです。

この形というのは、例えばアメリカのエスニシティの構造であるとか、フランスとかイギリスでの階級の構造というようなものと同じように、社会意識を説明するときには強力な力を発揮する分布です。あくまで Sociological Social Psychology ですから、説明する側、つまり社会の構造のこのような変化のほうに主たる関心を置いて、社会意識の変化を抜おう、これが計量社会意識論なのだ、というお

話です。

ちょうどいい時間になりましたので、以上で終わりたいと思います。ありがとうございました。

▶司会 吉川先生、どうもありがとうございました。

それでは、あと15分ぐらい時間がありますので、せっかくの機会ですからフロアのほうから、ぜひ講演についてのご質問なりを受け付けたいと思います。いかがでしょうか。では、先に手の挙げた大谷先生、お願いします。

▶質問者A レジユメの2枚目[図-1, p.65]の計量社会意識論のところなのですからけれども、聞いていて計量社会意識論が成り立つのだろうかということについて、若干疑問を持つところがあります。それで、社会意識を測定することがやはり非常に難しいはずで、社会意識を測定する測定の仕方が時代によって随分変わってきているだろうと思います。だからレジユメの図を見ますと、構造変動、左側のほうと、右側のほうのこの図が意識論じゃなくなってるのです。文化変容であるとか、これは社会学で言われていることだと思うのですが、本来ならば独立変数であるものと従属変数であるものとしての社会意識というものの関係であるべきだろうと。そのなかで、社会意識というものが右側にあった場

合に、その社会意識を測定すること自体が時代によって変わってきている。そのことがこの図には含まれているのだろうか。そのことをもう少しわかりやすく言いますと、例えばレジユメの後ろのほうで、いろいろとデータが出てきたところの性別役割分業であるとか、これが一番わかりやすいと思いますが、これを意識として聞いているわけです。それを聞いていた、例えば25年前の同じ質問を聞いたときに性別役割分業、恐らく、どんな質問でしたっけ、男は仕事、女は家庭みたいな話だと思うのですが、男は仕事、女は家庭という意識を測定している。その測定の仕方が、今と25年前の質問の投げ方が同じだとは私は思えない。そうすると、その分析をする必要が出てくるだろうと思います。その分析をすることが、左側の独立変数と右側の諸要素との関係を見ようとしているところで、何か矛盾が起きているように感じます。私はその意味でいいますと、社会意識を調査で測るということがどの程度まで長いスパンの分析に耐え得るのだろうかということについて、最近考えるようになってきたのです。それで、最近、鈴木栄太郎の調査論ということの本にまとめようとしているのですが、50年前の鈴木栄太郎が社会調査の話をしたときに、やはり意識ではなくて事実の積み上げによって調査をすべきだという言い方を50年前にしています。その意味でいいますと、鈴木栄太郎の言っていた調査というものは、結

構今でも使えたりするという感じがするので。そのときに、社会意識論ということで調査を組み立てることが私は無理かなという気もしているのです。そうすると意識ではなくて、もう少し違った言い方で変わらないものがある。例えば所得なら所得で測定できると。だけど、意識の場合だと違うかもしれないのだけど、その意味でいうと、その辺のところの分析ということ、社会意識論としてどのように考えるのか。いわゆる計量社会意識論というものが成り立つのかどうかといったあたりに、私は最近疑問を感じているので、その点についてどのような考えをお持ちか聞かせていただきたい。

▶吉川 大谷先生、ありがとうございます。

非常にクリティカルかつ重要なポイントをご指摘いただいたと思います。

この「計量社会意識論」という言葉ですが、これはグーグルで「計量社会意識論」と入れてクリックすると、私関連のものしか出てきません。なぜかという、私が作って、私しか使っていない言葉だからです。

今、大谷先生の言われたこと、ちょっとバラフレーズしますと、社会意識は調査で測れないものだと、社会意識論というのは計量分析では成り立たないというのが、元来の大前提なのです。だから、計量社会意識論という言葉は見田宗介とか宮島喬から見ると極めてパラドキシカルな言葉だと、「そんなもんあ

り得んよ」というところなのですね。

確かに、いくつかそういう限界があります。では限界があるから、社会調査は構造研究だけにスコープを絞るべきだと捉えてもいいのだろうか。それとも主観の部分、態度とか行動に類する部分に、何らかの意味づけを与えることができるだろうかということなのですね。繰り返しになりますけれども、私が計量社会意識論という言葉を使うときは、これが全知全能のもので唯一の方法だと思っているわけではなく、本日のレジュメの2ページの図[図-1, p.65]でお示したのは、現代社会論に対して一つの基礎的な道筋を示すものであるということです。「方法論的個人主義」というふうに言いましたが、その方法に限定して、それで調べられることを提供しようという立場です。例えば大谷先生の家に行き行って、紙を持って「今どんな気持ちですか」、「男性は外で働き、女性は家庭を守るべきですか」というようなことを聞いて、大谷先生が私に答えてくださる内容、これが私の研究における従属変数なのですが、これが大谷先生の生活構造をどれくらい描いているのかとか、大谷先生の行動、どういうアクションをとられるかということとをどれだけ予測できるかということ、しよせん知れているのですよ。知れているのだけれども、全く無意味だとは思っていないのですね。こうやって社会心理学的な方法でとったものを社会の構造の側にくっつけて、どういう仕組みになっているか

を語るということには、限定つきではあるけれども、一つの意義があるというのが私の考え方です。

▶**司会** それでは手が挙がっていた石田さん、お願いします。

▶**質問者B** 社会学部の石田です。今日は大変ためになるお話をありがとうございました。

せっかくの機会ですので、大きな話をもうちょっとお伺いできればなと思っていて、そのときに私はすごくおもしろいなと思ったのが、スライドの10枚目[図-2, p.69]のところですね。SSMの付加情報量の話で、これは非常に単純なのですが、すごく腑に落ちるおもしろい話だなと思いました。これは要するに、55年とか65年というのは以前何も調査してなかったからいっぱい情報量が得られる。10年ごとのスパンでやっていると、だんだん最終的には10年単位のものしか得られなくなってくる。情報量も低くなっていく。1985年は女性を入れたということで、付加情報量が上がっているわけですが、それを別にすると、どんどん付加情報量が小さくなっていくという構造だと思うのですが、これはまさに日本の戦後が経験してきた高度経済成長と全く平行だと思ったのです。まず55年近辺から高度成長が始まるというふうに言われていますけれども、農

村に大きな労働力プールがありましたし、みんな物を持ってなかったわけですから、消費意欲も旺盛である。だから、要するに伸びしろが多くあったわけです。その後どんどん成長していき、ついには伸びしろがなくなって、低成長が来るというのと、このSSMの情報量の話はすごくパラレルだと思って、おもしろいなと思いました。

これは単にSSMだけでなく、多分、戦後日本社会学が抱えている一つの問題ではないかなと思います。より広く、そういうふう感じたわけです。

つまり、僕もたまに夢想するのですが、僕は多分50年ぐらい前に社会学者だったら、多分もうバリバリと、いろいろな知見をばんばん出して、もうすごい大社会学者になっていたはずなのですが、残念ながらこのゼロ成長時代に社会学者になったばかりに、今だにうだつが上がらない悲しい状況にある。それは措いておいて、社会学全般、特に日本の社会学全般に、こうしたどんどん付加情報量が減っていつているという問題があると思います。そのときに、僕が感じているのは、きちんとした、学会としての戦略が何か必要ではないだろうかという漠然とした思いを持っています。でも現状はそれとは反対に、一人一人の研究が、どんどん細かなフィールドに向かっていつて、小さな情報を掘り出そう、掘り出そうとしているという何か逆の適応をしているような気がしているの

です。こういう大きな、どんどん新しいことがなくなっていつているという現状のなかで、今後、広く社会学、あるいは社会調査がどういふふうな戦略で調査なり研究をしていけばいいのかということについて、吉川先生だからこそ意識だといふふうにおっしゃられたと思いますけれども、そうした点も踏まえて、もう少しより細かく、お考えをお聞かせいただければと思います。

▶吉川 石田さん、ありがとうございます。

大きく見て同世代の方で、これからの研究生活のほうが長いという石田さんからの切実な質問だったと思います。私が今日の話に絡めて重要だと思うことは次のことです。

この50周年という機会に、私は最初の25年について何も語りませんでした。そして、後の25年が私たちに課された時代であり、研究対象だといふふうに言いました。この年齢コーホートの、レジユメの図[図-5, p.76]で見ると、この団塊の世代から左側を見ちゃ駄目なのです。見ると目がくらんで、そっちへ行ってしまうのです。実際に、これは笑い事ではなくて、日本の若い研究者でもずっと戦後をしゃぶり尽くそうとしている人が結構多いのです。こうやってデータがあると、どうしても、図の左側のほうがおもしろいからです。それで、左側のほうばかりをずっと見ている。すると、「高度経済成長期の日本人は実際はこうだったのだ」というようなこと

をやりがちなわけですが、それをやっていたのでは現代社会論にはつながらない。ですから、団塊の世代を含んだ、前の世代の人たちの時代を語ることをあえて考えない。そして平成に入ってからの日本社会を見る必要があります。

よく学生に言うのは、授業で「戦後日本社会は……」という先生がいるとすれば、もうその先生の話はあまり聞かなくてもいいよ、ということです。なぜかという、あなたが例えば部長とか課長になって下の人たちに何か話をするときに、「戦後日本社会は…」というふうに言う機会はないでしょう。だから、戦後日本社会ではなくて、今の日本社会のことを話してくれる先生の授業を受けたほうがいいのではないかと、というようなことを言います。

私は意識論をやっていますが、意識論にかぎらず、とにかくあの目のくらむような右肩上がりの時代を見ない、そこを生きた世代を見ない、というふうに心がけて研究する。そうすると、社会を見るときにスコープの「拡大倍率」も変わってきて、ちょっとした変動でも、これは微細だが重要な変動だ、というふうに見えてくるという形になると思うのですね。部分的ではありますが、私の考え方はそういうところにあります。

▶**司会** では最後になりますが、お願いします。

▶**質問者 C** 関西学院大学の名誉教授の萬成と申します。

非常に斬新な分析、考え方を示してもらいまして、ありがとうございました。

実は私、50年前に一つ調査をして、それを博士論文にしたわけですが、それは日本の経営者トップの、やはり1,500人ぐらいの日本の経営者、これトップです、当時の資本金10億円以上の会社の会長、社長、副社長という、そういうサンプルに対して、彼らはどういう年齢、学歴、それから職業経歴、それから父親の職業、それから祖父の職業までを調べました。それで、50年も前ですが、私は大体単純集計で、真横に海外との比較などをやりましたし、それから当時のSSMの人口の分布とか職業階層別の分布とかというのは調べましたけれども、実は重回帰分析が残っているなど思うのですが、先生が勤められている大阪大学の大学院生で、そういう研究者の仲間、そのデータを使いたいという人がおるかどうかが、ちょっと個人的な質問ですが。

▶**吉川** ありがとうございます。

先ほどの石田さんの質問とも関連するのですが、今のお話を聞いたときに、萬成先生のそういう経営者についての調査データというのがあり、それは50年前の日本社会を測り出しているという「それはすばらしいデータだ」と、そちらのほうに魅力を感じる

若い人も、私はむしろ多いのではないかと思います。

さすがに 50 年前のデータというのは相当に数が少ないですから、そういうデータを探して、—データマイニングというふうに言いますが— 古い時代の日本社会を描き直そうという、計量歴史社会学という分野の研究者もかなりたくさんいます。もし関心があるという学生がいれば、ぜひ伸介の労をとらせていただきたいと思います。ありがとうございます。

▶**司会** それでは、時間になりましたので質疑応答を終わります。今日は限られた時間のなかではありましたけれども、非常に中身が濃く、またいろいろな意味で挑発的というか、非常にチャレンジングであり、今後の社会学が何をすべきであるのか、社会学にかかわる者として、その研究・教育において我々は何をしていくべきなのかということに対して、非常に大きな示唆と提言をいただけたというふうに思います。

今日は吉川先生、どうも本当にありがとうございました。